

「中国語との出会い」

高校時代、英語が苦手だったことも影響し、大学の第二外国語は迷わず中国語を選択しました。中国語のイロハも知らなかった私は、必修の英語はともかく、「これで少しはローマ字と距離を置ける！」と思ったからです。

しかし、現実とは違っていました。日本の多くの大学で教授されているのは中国大陸の「普通話(標準語)」で、“v”以外のローマ字を用いて発音を表記するのです(台湾では注音符号という記号[ㄅ、ㄆ、ㄑ など]で表記します)。考えが甘かった…。

そして大学生活が始まり、多くの同級生は、「単位を取るため」と割り切って第二外国語の授業に出ていたようです。ただ、自分は英語が苦手で出来も悪い、

ならば、「せめて中国語は使えるようになりたい」と思い、中国語の学習だけは真面目に取り組みました。そのお陰か、大学4年間である程度の力がつきました。また、当時(1990年代前半)は天安門事件(1989年)の影響で停滞した対中投資が再び活発化し、中国経済に関するニュースと頻繁に接した時期でもありました。そのため、進学後の研究領域も自然と中国経済へ向かいました。

ところが、大学の授業で耳にしてきた中国語がいかに標準的で、訛りや癖のないものだったか、痛感する日がやってきます。それは、史料調査で初めて台湾に出かけた時のことでした。街で地元の人が話している中国語(標準語)が、自分の学習した発音とは異なって聞こえるのです。同じ中国語なのに、何度か繰り返し言ってもらわないと聴き取れず、随分戸惑いました。人や地域によって話し方に違いがあるのは日本語でも同じことなのに、中国語になった途端に対応できなくなるとは。ただ、そのような出来事も、訪台の回数が増えるにつれて無くなってゆきました。

教室での勉強と現実には、時としてギャップが生じます。とは言え、中国語の学習が中国経済に関心を持つきっかけとなったことは、紛れもない事実です。学生の皆さんも、偶然の出会いを必然に変えられるよう、日頃から様々な出来事に関心を持ち、その中の1つに情熱を注いでみるのが大切ではないでしょうか。

- 中国経済論Ⅰ・Ⅱ
- アジア経済史Ⅰ・Ⅱ

大石 恵

(おおいし めぐみ)



1973年生まれ。中国経済論・アジア経済史担当。史料調査で訪れる台湾で、地元民に間違えられること多数。